

道元禪と雲門宗に関する一考察

——特に善暹を手がかりとして——

石 島 尚 雄

はじめに

道元禪師（以下道元と略称）の著述である『正法眼蔵』や『永平広録』の中で、その重要性にもかかわらず、出典未詳のものがあつた。それはすなわち、『永平広録』一、第三七上堂等の「釈迦牟尼仏言、明星出現時、我与大地有情、同時成道。」の出典である。そして、最近、『続灯録』卷三の開先善暹の語である「老胡也祇道。明星出現時、我与大地有情、同時成道。」（Z、一三六、三六頁b-c）がその出典であることが判明した。（拙稿、「大地有情同時成道」再考、『曹洞宗宗学研究所紀要』第十二号、一三一―一二頁参照）

ところが、開先善暹については、その生没年が不詳であり、未だにその活躍年代を比定することができない。そこで今回は、紙数の関係もあり、開先善暹の活躍年代を比定することに絞って考察することにした。

一、開先善暹についての資料とその内容

開先善暹の伝については、『五灯会元』、『続灯録』、『普灯録』、『続伝灯録』に見出されるが、いずれの資料も生没年すら定かでない。これらを総合してまとめると次の様になる。

開先善暹は臨江軍の出身である。徳山慧遠の法を嗣ぐ。後に雪竇重頭（九八〇―一〇五二）に至り、「海上横行暹道者」とその超邁なる力量を誉められ、分座を許される程になるが、「道慙未厠嶺南能」と述べて雪竇のもとを去り、二十余年の間、国中を尋ねて、修行を続け、遂に無心の地を得ることが出来た。後に、道俗の希望に応じ、遂に開先に法を開き、以後十八年、開先に住し祖風を大いに振るつた。嗣法の弟子に雲居了元（一〇三二―一〇九八）がいる。そして、先に道元の引用した「明星出現時、我与大地有情、同時成道」という語をその開堂の日となえるのである。以上、伝の概略を述べたが、善暹の資料のみでは、生没年は皆目分らない。そ

こで活躍年代を比定する為には、係りのあつた人物まで範囲を広げて、次に考察したい。

二、善暹をめぐる人物について

幸いなことに、嗣法の弟子の雲居了元は、生没年が明らかなので、了元について検討してみよう。『統灯録』巻六に、

廬山開先善暹禪師（法嗣）。雲居山弘印禪師（諱）了元、姓林氏。饒州浮梁ノ人ナリ也。至道壬申、六月六日ニ誕生ス。…（中略）…即チ遍參尋、遠造廬山開先暹禪師法席ニ、投機シ印可（可）也。叢林ニ拔萃シ出アテチ為リテ宗匠ト、三十余年、九クヒ坐ス道場ニ。…（中略）…元符元年、元正七日、写レシ偈ヲ坐ニ滅ス本山ニ。…（Z、一三六、五四頁b—c）

とある。これによると、善暹の弟子の了元は、至（明）道壬申（一〇三三）六月六日に誕生し、善暹の法席に投機して印可せられ、三十年以上にわたって九たび道場で指導し、元符元年（一〇九八）に示寂したことが分かる。これによれば、善暹に印可を受けてから、亡くなるまでが三十余年であるから、元符元年（一〇九八）から三十余年前、すくなくとも三十五年前の嘉祐八年（一〇六三）頃には、善暹は確実に生存していたことが推定できる。なぜならば、その時に実在していなければ、弟子の了元を指導し印可を与えることはできなかった筈である。したがって、善暹が確実に生存していたと推察できる下限を、嘉祐八年（一〇六三）としたい。

次に、確実に生存していたと推定できる上限を検討してみよう。善暹の伝記によると、

後ニ至ル雪竇ニ、竇与レテ語ヲ、喜フ其ノ超邁ナルヲ、目ヲ日ヲ海上横行ノ暹道者ト。（『五灯会元』一五、Z、一三八、二九七頁b）

とある。これは、明らかに雪竇に参じたことを示している。そこで、ここに手懸かりを求めて、雪竇について検討してみよう。『明州雪竇山資聖寺第六祖明覺大師塔銘』に、

…。禪師諱重頭、字隱之。大寂九世之孫、智門之法嗣（ナリ）也。俗姓李氏。母李文氏、以太平興國五年四月八日、生大師於遂州…。七歳ニシテ過ル其ノ門ヲ、晩ニ持シ袈裟ヲ、喜ビハ不ニ自ラ勝ス。…。聞テ梵唄之声ヲ、輒シテ泣キ下ス。父母問ニ其ノ故ヲ、懇ニ請シ出家ヲ。父母執シテ不可サ。師不レ食セ者累シテ曰ク。咸平中終ニ父母喪ス。…。落髮シテ為ス弟子ト。…。住テ持ス雪竇資聖ト。…。師住持スルコト三十一載。度僧七十八人ヲ。…。其夜盥浴シ、整シ衣ヲ側臥シテ而滅ス。時皇祐四年六月十日。俗寿七十三。僧臘五十夏ヲ。…。（『明覺禪師語録』巻第六、I四七、七二頁a—c）

とある。これによれば、重頭は太平興國五年（九八〇）四月八日に誕生し、七歳の雍熙三年（九八六）に父母に初めて出家を申し出、咸平中（九九八一—一〇〇三）の父母の死をまつて祐四年（一〇五二）六月十日に示寂したことがわかる。「俗寿七十三。僧臘五十夏。」とあることから、出家したのは、二十三才の時、咸平五年（一〇〇二）のことである。そして、父

母は、咸平中に喪すとあることから、咸平元年（九九八）から咸平五年（一〇〇二）の間にあいついで亡くなっている。また「住持三十一載」とあることから逆算して、乾興元年（一〇二二）から皇祐四年（一〇五二）まで、雪竇山に住したことが明らかとなる。

以上のことをふまえて善暹のことを考えると、明らかに年長者と思われる重頭の生誕の年の九八〇年には、善暹は未だ誕生していないと思われる。また重頭が出家した一〇〇二年には、善暹は、その指導を受けることが出来ない。したがって善暹が重頭の指導を受けることができるのは、一〇二二年から一〇五二年の間に限られることになる。つまり、善暹が重頭から「海上横行遍道者」と誉められたのは、一〇二二年から一〇五二年の間の出来事になる。このことから、重頭の示寂の年の一〇五二年には善暹は確実に生存していたことが分かる。なぜならば、重頭が生きているうちに、善暹がその指導を受けられる様な青年僧に成長していなければ、「海上横行遍道者」というように重頭から誉めもらうことができないからである。

また更に、明らかに年下の弟子である了元が生まれたのは、一〇三二年であるから、善暹が生まれたのは、それ以前でなければならぬ。つまり一〇三二年には、善暹は生存していなければならぬ。このことから善暹が生まれたのは、年長

者の重頭の生まれた九八〇年から、弟子了元が生まれた一〇三二年の間であることになる。

さて、雪竇重頭が住持を始めた一〇二二年から、弟子了元の生まれた一〇三二年の間に起きた重要な出来事を考えてみたい。善暹が重頭に「海上横行遍道者」と誉められたのは、いつ頃の出来事なのであろうか。その事をここで考察してみよう。『五灯会元』一五に、

三更_ニ月下_ニ離_ル巖竇_ヲ、眷眷_{トシテ}無_ク言_ハ窓_ヲ碧_ヲ層_ヲ。二十余年_ノ四海_ノ間_ニ、尋_テ師_ヲ擇_ヒ友_ヲ未_ダ嘗_テ閑_ラ。今朝_得レ到_リ無_心地_ニ、却_テ被_ル無_心趁_ニ出_セ山_ヲ。（Z、一三八、二九七頁b）

とあり、また、『統灯録』三に、
後_ニ出_シ世_ヲ開_キ千_ニ。住_{スル}コト_ヲ十八年。大_ニ振_リ祖_ノ風_ヲ。（Z、一三六、三六頁b）

とある。つまり、雪竇を辞してから二十年以上も国中を修行してまわり、開千に十八年住持したのである。したがっていかに少なく見積っても、三十八年間は生存し、活躍していたのである。

ここで、善暹が確実に生存していたと推定できる下限の年の嘉祐八年（一〇六三）を思い起こす必要がある。ここから、三十八年逆算した天聖三年（一〇二五）は何を意味するのであろうか。これは、いかに遅くとも、この一〇二五年までに、善暹は重頭と相見して「海上横行遍道者」と誉められたこと

を意味する。実際は「二十余年」とあるから、それよりも以前であろう。このことは、重頭が雪竇に住し始めた一〇二二年と決して矛盾しない。したがって、善暹が重頭と相見して、「海上横行遍道者」と誉められたのは、一〇二二年から一〇二五年の間であることが確実視される。善暹は一〇二五年以後は確実に生存していなければならぬし、それ故に善暹が確実に生存していたと推定できる上限を、天聖三年（一〇二五）としたい。この推定は、重頭、善暹、了元の伝記資料から高い蓋然性をもって導き出される結論である。よって開先善暹（？—一〇二五—一〇六三—？）は十一世紀中葉にその活躍年代を比定することができる。

おわりに

道元（一〇二〇—一〇五三）は、その著述の中に、「明星出現時。我与大地有情。同時成道。」という語句を数多く引用し拈提している。それを列挙すると、『永平広録』では一卷第三七上堂、三卷第二四〇上堂、『正法眼蔵』では「行持上」巻、「古鏡」巻、「溪声山色」巻、「説心説性」巻、「発無上心」巻である。これらは、道元の、釈尊觀、悟道觀を知る上で極めて重要な語句であるにもかかわらず、その出典はいままで詳らかではなかった。今回、その出典は、『続灯録』巻三の「老胡也祇道。明星出現時。我与大地有情。同時成道。」（Z、

一三六、三六頁b—c）という開先善暹（？—一〇二五—一〇六三—？）の語句であることが判明した。

善暹は、雲門文偃（八六四—九四九）—雙泉仁郁—徳山慧遠—開千善暹—雲居了元（一〇三二—一〇九八）と法灯の連なる雲門宗の人であるが、その生没年は不詳である。故に、今回は、その活躍年代を比定する作業を試みた訳である。嗣法の弟子の雲居了元は一〇九八年に没しているが、その伝記によれば「出^テ為^リ宗匠^ト。三十余年。」とあるので、その教化の期間は三十年以上になる。したがって少なくとも三十五年逆算した一〇六三年は、その師の善暹は確実に生存していなければならぬ。というのは、その時既に示寂していたのでは弟子の了元に印可を与えることは出来ないからである。したがって、この一〇六三年は善暹が確実に生存していたと推定できる下限の年になる。

次に善暹は、雪竇重頭（九八〇—一〇五二）に参じて、「海上横行遍道者」と誉められたのであるが、この参学の時期を考察することによって、その確実に生存していた上限を知ることが出来る。重頭が雪竇山に住して教化したのは、『明覺大師塔銘』によれば、一〇二二年から一〇五二年までの三十二年間である。したがって、善暹が重頭に参じたのは、一〇二二年以後でなければならぬ。他方、善暹の伝記によれば、「三更月下、離巖竇、…二十余年四海間、尋師擇友、未嘗

閑」とあり、更に「後出世開千、住十八年。」とあることから、少なくとも重顕のもとを辞してから、三十八年間は生存していなければならぬ。そこで、その生存が確実に推定できる一〇六三年から逆算すると、一〇二五年という年が浮び上がってくる。実際は「二十余年」とあるところから一〇二五年以前になることが知られる。よって、重顕が雪竇山に住し始めた一〇二二年から一〇二五年の間に、善暹は重顕と相見して「海上横行運道者」と誉められたことになり、一〇二五年以降は必ず生存していなければならない。よって善暹は、一〇二五年から一〇六三年の間はその生存が確実であることがここに推定されたのである。

さて、『正法眼蔵』等に、善暹の語句を引用した道元（二二〇〇—二二五三）は、十三世紀前半がその活躍年代であり、その道元が重視した「明星出現時。我与大地有情。同時成道。」という語句を初めて述べた善暹（？—一〇二五—一〇六三—？）は、十一世紀中葉にその活躍時期を比定し得る。十一世紀前半には、雲門宗中興の祖雪竇重顕（九八〇—一〇五二）が出世し、『雪竇頌古』を撰述するなどしてその門風が大いに振ったことが知られる。善暹（？—一〇二五—一〇六三—？）は、その中興の祖である重顕に高く評価された雲門宗の禅匠である。

ところで、道元門下を見るに、「道元—懷辨—義介—瑩山

道元禅と雲門宗に関する一考察（石 島）

紹瑾」と法灯の続く道元下四世の弟子瑩山（一二六八—一三二五）は、日本曹洞宗では太祖と仰がれる人物であるが、その著述の『伝光録』に、

師於正安二年正月十二日始請益、釈迦牟尼仏、見明星悟道曰、我与大地有情、同時成道、…（中略）…、釈迦牟尼仏成道スルトキ、大地有情モ成道ス、…、『曹洞宗全書』宗源下、二七八頁上—下）と善暹の語句を引用して拈提している。これを見ると開先善暹（？—一〇二五—一〇六三—？）が、道元（二二〇〇—二二五三）や瑩山（一二六八—一三二五）に与えた影響は計り知れないものがあることが分かる。ここに道元禅と中国雲門宗のただならぬ関係が見出せる。かくして、今後、重顕や善暹を中心とした中国雲門宗の思想的解明が待たれる所以がここに見出せるのである。

1 『統灯録』卷三に、

「…迄至山僧、二千余年。月燭慧灯、星排道樹。人天普照、凡聖齊榮。且道承甚麼人恩力。老胡也祇道。明星出現時。我与大地有情。同時成道。」（Z、一三六、三六頁b—c）とある。

（キーワード）道元、大地有情同時成道、開先善暹、雲門宗

（曹洞宗総合研究センター宗学研究部門研究員）